

■ ユーロ/ドルがレンジから上下に放れる可能性に注目！

依然として、ドル/円は一目均衡表の日足「雲」の中での推移を続けている。ドル高と円高を同時進行させている外部環境に大きな変化は見られず、今後も米国の通商政策の行方を横睨みしながらの展開ということになるだろう。

昨日（12日）は「米国が中国に対して新たな通商交渉を提案している」とのウォールストリート・ジャーナルによる報道が材料視されていた模様だが、それが果たして「雪解け」につながるのかどうか、懐疑的に見る向きも市場では少なくないと聞く。ムニューシン米財務長官が敷こうとしている融和方向へのレールにライトハイザー-USTR代表は乗らないだろうとの読みらしい。

ただ、両国の対立にも自ずと限度というものがあるわけだし、このところ中国がやたらとロシアに擦り寄る姿勢を強めていることからして、そろそろ米国が中国に多少なり歩み寄る必要性というものが生じつつあるようにも思われる。

また、EUとの米通商協議においても、あまり強硬な姿勢を貫き続けると、それがロシアに利する結果となることはホワイトハウスも重々承知のことであろう。対ロシア政策を考えれば、やはりEUは味方につけておきたい。その実、今週10日にはライトハイザー-USTR代表とマルムストローム欧州委員との間で通商協議が行われ、USTRは「この日の協議は建設的だった」としている。そのうえで、10月に専門家の会合を開き、11月には一定の成果をまとめることでも双方の方針は一致しているという。

こうして見てみると、カナダとのNAFTA再交渉を巡る協議にしても、中国・EUとの通商協議にしても、総じてこの9月～11月ぐらいまでに間には一定の落とし処が見出される可能性が高いと思われる。もちろん、米国の対日政策（強硬姿勢）に対する市場の警戒というものも、今後は徐々に後退して行くと思える。

とはいえ、目先は米関税問題に対する警戒がなお市場に漂い続けており、本日（13日）行われるECB理事会においても当面の成長見通しを下方修正してくる可能性は高いと言える。加えて、本日はトルコでも中銀の金融政策会合が行われ、市場は利上げへの期待を高めている。問題は利上げ幅であり、どうやらコンセンサスは3.25%程度ということだが、なかには7.25%などとする向きもあるようで、結果的に3.25%内外では「失望」ということになるのかもしれない。

いずれにしても、本日以降は暫くユーロが動意づく可能性…。下図に見るように、足下のユーロ/ドルは一目均衡表の日足「雲」下限と89日線に上値をガッチリと押さえられる一方、21日線は下値を支えられており、極めて狭いレンジ内での推移を続けてきた。



このレンジ内での値動きも、さすがにかなり煮詰まってきており、イベント結果次第でいよいよ上下に放れることとなる公算が大きい。仮に、上に放れた場合は1.1800-1.1850ドルあたりの水準を一旦試しに行く可能性が高いと見られるが、やはり個人的には下に放れる可能性の方が高いと見る。その場合は、あらためて心理的節目でもある1.1500ドルを試す動きが見られるだろうし、同水準を下抜ければ8月安値が位置する1.1300ドル近辺の水準が意識されるようになると思われる。

(09月13日 11:55)